右翼の真髄を体現した作家・思想家

鈴木邦男の遺志をいつまでも

清貧を貫いて思想と「言論の覚悟」に殉じた文武両道

鈴木邦男さんとの出会いを振り返る木村三浩

さる3月23日、東京千代田区・日本プレスセンターで執り行われた「鈴木邦男　お別れの会」には、300人を超える皆様の列席、弔辞、弔電、献花を頂戴しました。本当にありがとうございました。ご挨拶をいただいた鳩山友紀夫様、田原総一朗様、鈴木宗男様、佐高信様、福島みずほ様をはじめ、皆様に御礼を申し上げます。会場には、大きな遺影と共に、数々の著作や活動を振り返る写真、映像が披露され、故人を偲ぶよい手だてとなりました。

みなさまに厚く御礼申し上げます。

木村　三浩 ●一水会代表

インタビュー・構成 椎野　礼仁

出会った当時の鈴木邦男さん

昭和52年の経団連たてこもり事件（YP体制打倒青年同盟）ごろから、鈴木さんの『腹腹時計と〈狼〉』『現代攘夷の思想』『時代の幽閉者』『行動派の読書術』等の本を読んで、非常に理論的で、変革の志の鋭さを感じました。冷戦時代には「反共親米」というのが右翼でしたから、当時で言う反米愛国、今で言う「対米自立」という思想などは、他の右翼にない斬新さがありました。

三島事件（昭和45年）や経団連事件の後に、鈴木さんは反体制新右翼として影響力を持ち始めました。僕は当時、国士舘高校を（名誉）卒業して、先輩が日本青年社で活躍していたので、チョクチョクそこの活動に出ていました。その延長で尖閣列島領有決死隊として、日本青年社の衛藤豊久隊長（故人）たちと現地に上陸し、灯台を建てる活動をしてきました。結局、二度上陸しています。

その後、自分たちで勉強会をしたり、高校の恩師の元村先生がOB等を集めてやっていた勉強会に参加したりしました。そこで鈴木さんの著作の読書会があり、次に直接、一水会の勉強会に参加するようになりました。

当時の鈴木さんは、今では想像ができないと思いますが、ロングヘアーに鼻の下に髭を蓄えていた。ちょっとむさ苦しい感じだけど、ジーパンを穿いてワイルドな感じもあって左翼っぽかった（笑）。

昭和55年の三島・森田追悼会「野分祭」の時あたりから一緒に行動し始めました。鈴木さんは、街頭活動で弁舌さわやかに演説するタイプではなくて、通り一遍の言葉を使わず鋭い指摘をするタイプでしたね。

すでに鈴木さんに対する「容共右翼」という批判はあったけど、反体制・反権力の実践活動もやっていました。戸塚警察や交番に対

する抗議活動とか、千代丸健二氏の無法ポリス論を「レコンキスタ」の一面に載せたりとかね。鈴木さんは右翼で凝り固まっていてはいけないと、太田竜特集も載せたりしましたね。一水会フォーラムにも竹中労とか、左右を問わずいろんな人を呼んでましたよ。

僕なんかは、当時主流だった新左翼運動に対するコンプレックスもありまして、いま何が問題かよく考えて行動しよう、負けずに頑張ろうと、反権力的な戦いを一緒にやってました。

在りし日の鈴木さん（右）と椎野（2017年９月）

テロに対しての鈴木さんとの異同

テロに対しては、テレビ朝日の「朝まで生テレビ」の右翼特集の時（１９９０年）、７人の右翼のうち、鈴木さんだけが反対しました。テロによって本質的な問題が解決できたのかという疑問から、反対に至ったのです。私は条件付きで留保の立場をとっています。圧倒的に独裁的な権力があって、パレスチナのように理不尽な状況に置かれているとき、テロというより抵抗権としての物理的な力、行動力は必要なのではないか。それは自衛ですよね。テロ、暴力という言い方は権力側からの物言いですから。それは鈴木さんも同じだと思います。

よど号や全共闘に対する同世代意識

高澤皓司（作家）に誘われてピョンヤンに行ったり、山中幸男（救援連絡センター事務局長）さんに誘われて、よど号赤軍の田中義三の救援のためにタイまで行きました。鈴木さんは反体制派に対するシンパシーもあっただろうけど、それ以前に同世代意識があったように感じるなぁ。全共闘世代に対してもね、なにか時代意識の共有性がある。仲間感のようなものがね。全共闘世代の人の中にも、鈴木さんに対するある種の共通意識があったのかな。

僕だって、全共闘以後世代の左翼に対して、似たようなものがありますよ。つまり、金を儲けて、うまいもの食って、いい暮らしをするという価値観に対するアンチ。少しは日本のことも考えましょうよという気持ち。対米従属になって、米軍基地のために大変苦労している人もいるじゃないですか、そういう問題を考えて、米軍を撤退させましょうよ、と。パレスチナのことも考えて、イラクのことも考えて。今は逆に、米覇権のプロパガンダに堕ちて、マスコミも含めてイラクのサダム・フセインやロシアのプーチン大統領の方ばかり非難している。その方が安心なんですね。そうじゃない視点があるじゃないかと、私は異議申し立てをしている。ある意味、言わなくてもいいことを言ってる。それは鈴木さんと共通だったと思います。

若手の台頭が鈴木さんを変えた？

鈴木さんは高校時代、〝内職〟して作ってた英単語帳を先生にストーブに投げ込まれて、その先生をぶんなぐって一回退学になってますが、血気盛んですよね。しかし早稲田まで出て、産経新聞に入って、そのまま黙って就職してれば、それなりのところに行ったんだろうけど、防衛庁の不祥事に抗議して、逮捕されてしまう。それで退職になっちゃう。戸塚署の交番攻撃とか、函館の日ソ交流会館とかでも、先頭に立ってやる。そういうところを我々は見てるんですよ。退路を断って活動する。信念を貫いてる。それが指導者ですよね。

思わず手が出るというようなと

ドキュメンタリー映画「愛国者に気をつけろ！」に出演して演説する鈴木邦男さん（2020年２月公開）

ころがなくなるのは、僕が入った頃からじゃないかな。若い世代に代行機関ができたから（笑）。

でも大企業の幹部とかは性に合わないんでしょうね。日常、同じことをずーっとやることができない。社会の中で一般化されちゃうのが嫌。自分の主張ができないとか、知的好奇心がそがれちゃうとか、去勢されて生きていくのが嫌なんですよ。本を読むとか、原稿書くとか、問題意識を持って講演するとか、非日常が好き。常に刺激を求め、また堕落しないように自分との闘いを続けていた。

空気読まないというところは確かにあって、ご馳走になる時だって、いいものばっかりワーッと喰っちゃうとか、人のものまで喰っちゃうとか、そこらじゅうでやってた（笑）。

群れてベタベタすることが嫌い

欠点？　喋ってることがたまに変わっちゃうことがありました。表現が微妙に変化する。でも基本はぶれてない。僕らは人間的に信頼を置いていたから大事に至らない。人によっては「冷たい」という人もいるけど、深い人間関係を結ぶのは本能的に避けてたというふうはありましたね。鈴木さんの好きな竹中労の言葉「人は弱いから群れるのではない、群れるから弱いのだ」を地でいっていて、群れてベタベタしない。

偲ぶ会で挨拶する木村三浩

僕だって、人間関係に入り込もうというより、任されてることをきちんとやりたいと思ってました。巧言令色な人を嫌ってましたね。

人間的な魅力があるから、女性にもよくもてた。好かれて、ある点までバーっといくけど、ふと身をかわすというか。光源氏みたいなところがあった。本物の恋愛関係にはまることはそう無かったんじゃないかな。女性の怨みを買う場面もあったかもしれないけど、プライベートには全く関知しないのでよく知りません。

赤報隊への誠意

僕は本当のところは知らないけど、鈴木さんが秘かに朝日新聞阪神支局を襲撃してたなんて話は、絶対ないですよ。

鈴木さんは「容疑者に会った」なんてほのめかしてるけど、どうなんだろう。何も語らないまま、墓場へ持ってっちゃった。僕も鈴木さんを超えるわけにはいかないから、何も言えない。推定も想像もしない。面白おかしくしゃべる才は僕にはないしね。

映画「愛国者に気をつけろ！鈴木邦男」の中でも言ってますけど、赤報隊は鈴木さんが犯人視されたことで、自分たちへの追及が緩んで助かったんじゃないかな。鈴木さん自身が、あいつらかも知れない、こいつらかも知れないなんてことは、一言も口にしなかった。それは、赤報隊の前身の組織と言われる「日本民族独立義勇軍」が起こした事件の声明文が送られてきて、「レコンキスタ」に載せた時からの、反体制派をかばう義侠心というか、誠意が感じられた。思想性と実践を貫いている。一水会は警察から犯人視されるキャンペーン張られても、関係ないから本質的なダメージは受けなかった

けど。

ただ、これは赤報隊に関してだけじゃないけど、メディアに発信するとき、つい思わせぶりに書いちゃうという面はあった。サービス精神が旺盛なんです。

「自由な押し付け憲法の方がまし」

この言葉の元は丸山眞男にあるのではないか？

鈴木さんの物言いは、本当に上手いというか計算されているというか。有名な、右翼の逆鱗に何枚も触れた「不自由な自主憲法より、自由な押し付け憲法の方がまし」というフレーズ。鈴木さんの言論と個人の尊厳を大切にする立場を本当にうまく、アクロバティックに表現して、言い得て妙だけど、あれには前につく詞書があるんです。「安倍政権による改憲だったら」という言葉です。

この前、片山杜秀さんの『11人の考える日本人』（文春新書）という本を読んでいたら、最終章に丸山眞男が取り上げられていて、こういう言葉が紹介されてました。

「私自身の選択についていうならば、大日本帝国の『実在』よりも戦後民主主義の『虚妄』の方に賭ける」

これを読んだ時、〝ああ鈴木さんの発言はこれをもじってるんだ〟と思いました。

「安倍政権による」という言葉は何を意味してるかというと、「アメリカ傀儡による日米一体の不自由な自主憲法より」と読み替えるべきなんです。自主憲法への批判は、国粋派はみんな怒るかもしれないけど、よくよく考えたら、今ある憲法をまず守って、傀儡憲法を作ろうとする人々の意図を打破して、より日本的な、創造的な憲法にしていく。その憲法は自由であり、寛容であり、差別なきものであり、和を持って尊としとする憲法でなければならない。鈴木さんは日米一体、傀儡憲法に対する抵抗の比喩として語ってるわけです。その比喩の淵源はおそらく丸山眞男にあるというのが、僕の読み方です。

数々の著書をものにした鈴木さん

鈴木さんは時代の避雷針

だから世間で言われているように、鈴木さんは転向したわけじゃない。対米従属への批判は一貫しているし、軸はぶれてない。社会の方が変わっただけです。鈴木さんの態度は、社会が危ない方向に動こうとするとき、反対の意思表明をする。例えば早稲田に入学したとき、キャンパスは革マル派の支配下にあった。だから異議申し立ての活動をした。私は「危機を察知する避雷針」だと呼んでいます。つまらない煽りなどには決して乗らず、発言を続ける。それが本来の右翼・民族派の本源だと思います。

それとぜひ言っておきたいのは、鈴木さんの清貧性ですね。かつては右の陣営は活動資金を「企業回り」という手法で得ることがあった。それが商法改正でだめになり、今や反社会勢力などのイメージが喧伝されているけど、鈴木さんは一水会には「企業回り禁止」を徹底してきました。企業批判をしている我々が、会社回りをして寄付を求めたり、自分たちの新聞や雑誌に広告をもらう、つまり活動資金を集めるのはおかしいだろうということです。実際、法改正で資金集めができず、活動をやめたところもありました。

だから一水会の機関紙「レコンキスタ」は、あくまでも言論の武器。読者や支援者の定期購読料をいただいて運営している。だからという訳じゃないけど、政治的主張だけでなく、様々な社会問題、環境、原発、農業などに広く門戸を開いています。それは鈴木さんの教えです。もうひとつ、勉強会「一水会フォーラム」も同じです。現代の「老荘会」と位置づけ、苦

しい中でも、左右・老若男女、研究者、ジャーナリスト、活動家等々を講師に招いて毎月開催しています。

鈴木さんの清貧性という意味では、住まいが好例です。一水会の活動を始めた頃から、数十年、学生アパートそのものの6畳一間の「みやま荘」に住み、結婚もせずに清貧そのものの暮らしをしていました。さまざまな人が「あれだけの名のある人がこんな家に」という思いはあったでしょう。でも、そういう潔さにほれ込んでいる人も少なくありませんでした。

私は結婚もしたし、子供もいますが、鈴木さんの清貧や勉学の教えは、継承するつもりです。僕が30歳を過ぎてから、慶応義塾の法学部（通信課程）に入学し、苦手な英語に苦労しながら、8年かかって卒業できたのも、鈴木さんのお陰です。大学院にも行きましたし、卒業論文の指導教授小林節先生との知遇も得て、さらに人脈を広げることもできました。

鈴木さんは他人に対して押しつけのない人でした。正義を押し付けない。勉学の教えは、鈴木さんの背中から学びました。基本を読み、学び、交流しろ、負けることを恐れず議論しろと、鈴木さんは口癖のように言っていましたが、決して無理な強制はありませんでした。やはりよく言っていたのは、人は馬を川までは連れて行くことはできる、でも水を飲むかどうかは自分で決めろと。

ある意味で、高校の時から右翼の運動をしてきた「活動坊主」の僕に大きな指針を示してくれたのも鈴木さんだったし、これまでに縁ができ導いていただいた先輩、そして後輩たちにも感謝しています。

言論の覚悟

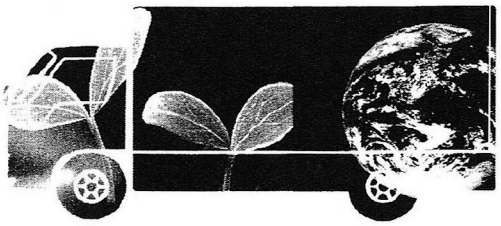
みやま荘の話が出ました。これもよく知られた話ですが、鈴木さんは自分の本の奥付には、みやま荘の住所と電話番号を入れていました。自分の言論に責任を持つという意思の表れで、鈴木さんが亡くなった時、「言論の覚悟」を賞賛する追悼文には、このことを取り上げている人も多かった。もちろん、「愛国者に気をつけろ！鈴木邦男」にも映っていたように、映画「ザ・コーブ」の時に、上映に反対するため映画館に押しかける、時には映画館の支配人の自宅まで押しかける。そういう動きに対して、鈴木さんは映画館を背にして彼らと対峙し、「映画を見ないで反対するな」「弱い者いじめをするな」「俺とサシで話そう」と対決していた。映画「靖国」の時は、僕も中心になって、全国の民族派に呼び掛けて新宿のロフトプラスワンで、上映会をやりました。

こういうことが鈴木さんの、単なる言論人ではない覚悟だったと、今にして思います。享年79歳、早すぎる逝去だったと悲しまれてなりません。

最後にお問い合わせも多いので、触れておきますが、納骨は故郷仙台の菩提寺に無事葬られ、その著作権の管理は実弟の鈴木宏三氏にお引き受けいただきました。

走ることが、暮らしを支える。走ることが、未来を支える。

(社) 全日本トラック協会は、環境問題に真剣に取り組み、地球の明日を考えたトラック輸送の実現をめざします。



そのためにまずは、いま必要なことから実施しています。
●無駄なアイドリングをやめる
●制限速度を守る
●過積載や過労運転をなくす
●共同輸・配送などで、輸送の効率化を推進する
●低公害車の普及を促進する

トラックは、変わりつづけます。生活と環境を守るために。

JTA 社団法人 全日本トラック協会

トラックに関する楽しい、ためになる情報を満載。ホームページ http://www.jta.or.jp